

大谷大学真宗総合研究所

# 研究所報

No. 10

1984. 7. 31.

|    |  |    |
|----|--|----|
| 目次 | 研究所の課題                                     | 1  |
|    | 昭和59年度「指定研究」<br>研究計画紹介                     | 3  |
|    | 昭和58年度「指定研究」<br>研究経過報告                     | 4  |
|    | Shin Buddhist Studies and<br>America Today | 7  |
|    | 昭和58年度「一般研究」<br>研究概要                       | 11 |

## 研究所の課題

真宗総合研究所長 武田武磨

『研究所紀要』が創刊されて、研究所の事業も一応かたちを整え、活動の軌道に乗ったといえるであろう。石の上にも三年という言葉があるが、大学付置の研究所の成果は、その程度の年限では、評価の対象にはとうていならない。まだ発足したばかりという以外にはない。しかし設立の当初において見えなかったことが、これまでの経過において、ずいぶん明らかになってきた。それらのことは、見方をかえれば、研究事業の今後への課題であるともいえる。特に現状の各研究プロジェクトで、考慮して積み重ねていくべき、共通した課題ではないだろうか。

それら課題はおおよそ次の四つにまとめて考えられてよいであろう。第一は、資料蒐集の問題である。研究所は、一定の研究方向においての資料を、可能なかぎり蒐集していく必要がある。それによって今後、研究所がその方向での資料センターたる特徴を発揮しうることにもなるからである。

現在「真宗学事研究」では、近世・近代の特に真宗教学を中心とした学事の動向に関する史料が集められつつある。これはそのプロジェクトの前身であった「真宗総合研究」の成果を受け継ぎながら、行われているものである。現状は、まだ学内所蔵の史料の一つ一つにあたりながら、定められた諸項目に分類して、カード化されている段階である。これがある程度の進捗によって、教学の展開や教育機関の推移の、どのような部門についても、それを研究するのに必要な文献を一覧できる「研究史料年表」等の作製をも目論むものである。本年度の一般研究の中で、幡谷明教授を代表と

する共同研究「『教行信証』章節の共通表示化への研究」は、教行信証に関するあらゆる資料の蒐集にあたっているし、大桑斉教授を中心とした共同研究「真宗寺院史料の研究」は、その課題の通り、すでに蒐集された真宗末寺に残された文献・遺物を調査・整理する仕事が進められている。後者の史料は、今後、系統的に蒐集・整理されていくことが望まれてもいるところである。いずれにしてもそれらは、「真宗学事研究」の資料と、どのように関連づけられ、研究所の資料として蓄積され研究に供されていくか、が考えられてくるであろう。

更に「海外仏教研究」では、すでに現在まで、欧文々献による仏教研究の実状が検討されてきたことから、それら文献の蒐集が精力的になされている。そのうち、過去二十年間にさかのぼって、北米を中心にする仏教研究の著作・論文の購入とリスト作製がなされてきた。その成果の一部として、浄土教関係の著作論文目録が、『研究所紀要』創刊号に掲載されたところであり、国内外からのかなりの反響が寄せられ、この種の仕事の重要性が再認識されている。これら資料の蒐集が進んでくれば、諸外国の仏教研究の状況が鳥瞰できるようになる。

課題の第二は、研究や教育の方法論を創造していく問題である。研究所設置の意義については、すでにこれまでの当所報の紙面においても、研究の「総合」性をテーマとして、諸先生方によって論じられてきた。しかしそれら諸論の内実化は、現実には研究せられているところで果されていくものであり、その具体的な問題が、研究それ自体の

方法に顕われてくるものである。前述の資料蒐集においても、それは単なる量的な蓄積作業に終るものでなく、むしろそれら資料の再解釈が前提である。その場合の、いかに解釈するかが問われているのである。その成果を得ることによって、研究所へ関わった諸先生方が、教育へもどった時の還元も可能となるのであろう。

「真宗学事研究」は、「近代における真宗の展開」と研究テーマを設定した「真宗総合研究」以来、歴史的経過の評価を、如何なる視点からなすべきかという問いを、継承しているのである。資料の蒐集は、その評価の実証を果たす目的をもち、また集められた資料は、その評価によってはじめて生きたものとなる。研究例会は、そういう観点に立って行われてきているのである。「海外仏教研究」では、諸外国での研究の現状把握が、著作・論文等の細かな内容にまで検討されている。やはりそこでの関心の中心は、研究方法の把握にあるといえる。いわゆる仏教学は、諸仏典の文献学的研究が主流であろうが、欧米の最近の動向は必ずしもそうとはいいきれない。文献学にしても、解釈の方法がきびしく問われている傾向があり、一方において、仏教が、アジアの伝統文化全体の展開のうちでどう位置づけされるのか、というアプローチが目立ってきている。むしろ、人類学、宗教学、社会学、心理学、哲学、言語学、東洋学、日本学等といったいろいろな分野からの研究へと、拡がりを見せている。日本における仏教学の、依然として詳細な専門的な文献研究が、それらの動向とどのように交流を果しうるのか、それが方法論の課題の中心である。

「大蔵経学術用語研究」と「チベット文献研究」でも、索引の編集や文献の紹介による出版を中心としながら、その際の典籍の調査、解説において、解釈上の問題にも関心がもたれているのは当然である。「一般研究」に採用される諸研究も、現在までの学的状況をふまえた上で、これからの何らかの新しい展開が期待されているのである。

課題としての第三に、教育・研究における新しい試みの導入の問題が上げられる。これは具体的な技術上の試みのことをいうのである。例えば、エレクトロニクス関係の技術をどう導入するかの問題がある。資料・情報をデジタル化することによってのみ処理されていたものが、現在では、そのまま<sup>なま</sup>生のかたちで処理できるようになり、大きな拡

がりをもってきた。すでに「海外仏教研究」の資料を、コンピューターによって収集する作業は、実験的に行ってきた。今後は、研究上のいろいろな検索によって、必要とするデータをすぐに引き出せる規模に、メカニックそれ自体を拡大することが望まれている。このことは、他のプロジェクトの研究資料の処理においても、同じことが考えられている。そのための設備と人材がそれに対応できるかどうかである。このような技術的な問題は、教育方法や研究成果の発表の仕方にもまで及んでいる。これらの新しい試みは、研究所において、取捨選択を間違ひなく行っていく必要がある。

第四の課題は、研究員の関わり方の問題である。研究所には、専任の所員は存在していない。研究プロジェクトがあるだけである。そのプロジェクトを構成する者として任用された教職員が出入りしているのである。したがって、それら研究員の関わり方には、次の四つの問題がある。一つには、教育のカリキュラムとの関係が問題となる。研究に十分に専念できるよう配慮されねばならない。二つには、特に指定研究に関わる場合、総合性を重視するため、研究課題が自身の専門領域と必ずしも一致しない問題がある。次には、研究年限を一年更改をたてまえてしているため、研究プロジェクトにとっても、研究員にとっても、研究の持続性、継承性についての配慮を必要とすることである。四つめとして、研究補助員を中心とする人材養成の問題がある。博覧館の完成による研究室体制の充実を一方において、研究所における大学院生等の関わりには、どのような独自の考え方が持ちうるかである。研究室では<sup>タテ</sup>の研究分野における指導体制の下で関わるに対して、研究所では<sup>ヨコ</sup>の研究相互の総合的体制において関わるものと考えられようか。

さて、研究所発足以来明らかになってきた諸問題は、四つにまとめた以上の課題である。それらは、研究所がその発足当初において願われた、総合化への具体的な課題といっているのである。思うにそれら課題は、現状において果されつつある研究業務の着実な積み重ねによってしか、また克服されないのもあろう。その着実な歩みが、研究所が今後望まれている方向で、新しい企画を立て、そして実現していく、しっかりした基盤をもつことになるのである。

## 大谷大学真宗総合研究所

## 昭和59年度「指定研究」研究計画紹介

| 研 究 名                                      | 研究課題及び研究組織   |
|--|--|
| <b>真宗学事研究</b><br>(特定研究 廣瀬 泉)<br>(代表 学長)    | 研究課題 「真宗学事資料の研究」<br>研究員 大桑齊(チーフ・教授・日本仏教史学) 江上浄信(助教授・真宗学) 片野道雄(助教授・仏教学) 鈴木幹雄(助教授・倫理学) 若槻俊秀(助教授・中国文学) 武田武麿(所長・教授・宗教学)<br>嘱託研究員 木場明志(助手・国史学) 草野顕之(前特別研修員・日本仏教史学) 経隆優(博士課程修了生・真宗学)<br>研究補助員 深田虎雄(博士課程修了生・日本仏教史学) 一楽真、片山伸、金石忍、熊木剛(以上博士課程)   |
| <b>海外仏教研究</b><br>(特定研究 廣瀬 泉)<br>(代表 学長)    | 研究課題 「海外における仏教研究の文献・資料に関する研究」<br>研究員 長崎法潤(チーフ・教授・インド学) 白土わか(教授・仏教学) 寺川俊昭(教授・真宗学) 箕浦恵了(教授・西洋哲学) 安富信哉(専任講師・真宗学) 武田武麿(所長・教授・宗教学) 片野道雄(主事・助教授・仏教学)<br>嘱託研究員 今井亮徳(開教使・在米) 今枝由郎(フランス国立科学センター研究員) 大河内了義(神戸大学教授) リノ・ベリーニ(本学非常勤講師) ジャン・ノエル・ロバール(フランス国立科学研究所主任研究員・高等学院講師) 宮下晴輝(助手・仏教学) ロバート・ローズ(本学非常勤講師)<br>研究補助員 山野俊郎(博士課程) |
| <b>西藏文献研究</b><br>(委託研究 廣瀬 泉)<br>(代表 学長)    | 研究課題 「大谷大学所蔵の北京版西藏大蔵経及び蔵外文献の文献研究」<br>研究員 小川一乗(チーフ・教授・仏教学) 片野道雄(助教授・仏教学) 小谷信千代(専任講師・仏教学)<br>嘱託研究員 ツルティム・ケサン(本学非常勤講師)<br>研究補助員 松田和信(前特別研修員・仏教学)  |
| <b>大蔵経学術用語研究</b><br>(委託研究 廣瀬 泉)<br>(代表 学長) | 研究課題 「浄土教関係典籍における学術用語の総合的研究」<br>研究員 古田和弘(チーフ・教授・仏教学) 神戸和麿(教授・真宗学) 木村宣彰(専任講師・仏教学) 延塚知道(専任講師・真宗学)<br>嘱託研究員 一色順心(助手・仏教学)<br>研究補助員 江馬耀準(博士課程修了生・真宗学) 織田顕祐(博士課程)  |

上記新規の「西藏文献研究」は、これまで進められてきた北京版西藏大蔵経丹殊爾の勘同目録の編纂(第七分冊、般若部以後)と蔵外資料の研究との二部門からなる。

昭和59年度「一般研究」の選考結果は本誌前号に掲載されたが、研究組織の上で、幡谷教授の共同研究の研究補助員の中、小泉元端にかわって金信昌樹(修士課程)に、大桑教授の共同研究において、嘱託研究員黒田俊雄、研究補助員草野顕之にかわって上場顕雄(嘱託研究員、本学非常勤講師)に変更された。又、研究員・藤田昭彦助教授の専門分野を「心理学」と訂正します。

昭和58年度

## 「指定研究」研究経過報告

## 真宗学事研究

## 「真宗学事資料の研究」

囑託研究員 経隆 優

真宗総合研究所における昭和58年度の指定研究「真宗学事研究」は、前年度までをもって終結した「真宗総合研究」によって明確になってきたところの真宗大谷派の「学事」に関する基礎的な資料の収集と、その「学事」の展開を通観できる歴史記述の必要性という二つの問題を発展的に継承して組織されたのである。従って「真宗学事研究」のその研究目的は、近世における高倉学寮の成立から現在の大谷大学に至るまでの真宗大谷派の「学事」、つまり学寮・大学等の制度的側面と、そこにおける教学および諸教・諸思想の研究と教育とに関する資料の収集整理とその研究とにある。

58年度この研究班は、5名の研究員と若干名の研究補助員ならびに資料整理員によって構成され、その研究作業が進められた。研究作業の方法は、(1)その全体的な研究を進めていく方向と、(2)その資料の収集整理を進めていく方向との二つの方向をもって進められた。

そしてまず(1)の全体的な研究には研究員があたることとし、年度の始めに各研究員は各自の専門分野との関係から個別の研究テーマをもち、一年間それぞれ各自その研究を進めるというかたちでおこなわれた。またその各研究員のそれぞれの研究とは別に、研究員が真宗大谷派の「学事」に対する通史的な理解をより深めていくために、『大谷派学事史』（『続真宗大系』巻二十所収）を通読していく研究会を五回もった。さらに、学外より特別に講師を招いた公開の研究会を二回開くなどして研究班全体の視野の拡大等を計った。このような研究活動を進めてきた結果、年度末までに各研究員は、近世・近代における真宗大谷派の「学事」に関する基礎的な知識をいよいよより詳細に会得することができた。加えて、年度の始めに各研究員が個別にもった研究テーマそのものが

いよいよ拡大深化し、「学事」の展開を研究していくうえでの問題点等が非常にはっきりとしてきたことである。

また一方、(2)の資料の収集整理には研究補助員と資料整理員とがあたることとし、その作業が進められた。この資料整理班は、主任研究員の指導のもとに「真宗大谷派学事資料年表」（仮称）の作成を最終的な目標としてその作業を進めた。この「真宗大谷派学事資料年表」とは、高倉学寮成立以来の真宗大谷派の「学事」に関する項目についてどのような資料があるかを年表形式にまとめていき、そして、それが真宗大谷派の「学事」に対する全体的な研究への手引きとなることをねらいとするものである。その作業は具体的に、基礎的資料のリストアップ、その収集、そして年表作成のためへの項目別・人物別の年譜カードの作成を進めてきた。そして年度末までに、約二百数点におよぶ資料のリストアップと、たとえば『高倉学寮諸制条』、『真宗大谷学寮講義年鑑』、『上首寮日記』、『貞享行願記』等々の約八十数点にものぼる資料を収集し、そして約一万枚以上のカード化の作業を終えた。

「真宗学事研究」は、58年度概略このような研究活動を推進したことである。年度末までに開催された研究会の中で主なものは次の通りである。

## ＜研究会＞

- 5月31日 大桑 斉（研究員）  
「宗学の草創期について」
- 10月11日 片野道雄（研究員）  
「学寮創設以来の仏教学の歩み」
- 11月14日 江上浄信（研究員）  
「学寮における宗学研究」
- 12月19日 若槻俊秀（研究員）  
「学寮と外学」
- 3月14日 鈴木幹雄（研究員）  
「宗学の固定期及び新進期について」

## ＜公開研究会＞

- 6月27日 平田厚志（龍谷大学助教授）  
「初期真宗学の思想史的意義」
- 12月12日 西田真因（大谷専修学院指導）  
「『歎異抄』の文献研究」

海外仏教研究 (Committee for the Study of Overseas Buddhism)  
昭和58年度研究経過報告

「海外における仏教研究の文献・資料に関する研究」  
Study of Research Trends in Buddhist Studies Outside Japan

囑託研究員 ロバート・ローズ (Robert F. Rhodes)

The aim of our research project is to investigate in a systematic manner, the current state of Buddhist studies in the Americas and Europe. During the 1983 academic year, our research project concentrated its efforts on investigating the state of Buddhist studies in North America. To this end, we conducted the following activities:

**I. Monthly Seminars (研究例会)**

Once a month we invited scholars, including both those of Otani University as well as outside experts, to share with us their knowledge of Buddhism and Buddhist studies overseas. Speakers were not limited to specialists in Buddhist studies proper, but also included scholars who approach Buddhism from the standpoint of philosophy, literature, etc. In keeping with the year's theme, most of the lectures dealt with the state of Buddhist studies in North America. Through these lectures, we were able to gain extensive and detailed knowledge of current trends in the study of Buddhism in America and Canada. The lectures which were given were as follows (Japanese titles are given where the lectures were given in Japanese).

1. May 17, 1983. Dr. Royall Tyler (University of Wisconsin) アメリカにおける日本学の現状—特に中世文化を中心として—
2. June 21. Prof. Okochi Ryogi (Kobe Daigaku; Research Associate, Committee for the Study of Overseas Buddhism) オランダの宗教事情の瞥見
3. June 29. Prof. Ichigo Masamichi (Kyoto Sangyo Daigaku) アメリカにおける仏教学の現状
4. November 11. Dr. Minoru Kiyota (University of Wisconsin) アメリカにおける仏教学の動向—日本における仏教学との比較において—
5. November 29. Mr. Paul Swanson (Research Fellow, Shin Buddhist Comprehensive Research Institute) 日本およびアメリカ仏教学私見
6. December 6. Prof. Odani Nobuchiyo (Assistant, Otani University) アメリカ仏教学の方法
7. January 20, 1984. Prof. Imaeda Yoshiro (Member, CNRS; Research Associate, Committee for the Study of Overseas Buddhism) フランスにおける東洋学—研究教育機関の現状
8. February 29. Dr. Lino Bellini (Lecturer, Otani University; Research Associate, Committee for the Study of Overseas Buddhism) 最近のカトリックの仏教への関心

Further, the committee sponsored the following lectures during the year.

1. July 7, 1983. Dr. Thomas Kasulis (Northland College) "Shin Buddhist Studies and America Today"
2. September 9. Prof. Dr. Heinz Bechert (University of Göttingen) "Remarks on Recent Studies on the History of Early Buddhist Sects or Schools"
3. October 26. Prof. Dr. J. W. de Jong (Australian National University) "Recent Buddhist Studies 1973-1983" (Joint sponsorship with the Bukkyo Gakkai)

## II. Seminar for the Investigation of Academic Works (資料検討会)

As a part of our research into the Buddhist studies of North America, members of the project, together with interested faculty and graduate students, have regularly been meeting to discuss articles by American Buddhologists. Through these seminars we have attempted to study in detail the interests and methodology of Buddhist scholarship of North America. This year, the following works were taken up for discussion: 1. May 24, 1983. Alex Wayman, "No Time, Great Time and Profane Time in Buddhism" (J. K. Kitagawa and C. H. Long, eds. *Myths and Symbols*, 1969, pp. 47-62.) 2. June 7. Luis O. Gomez, "Shinran's Faith and the Sacred Name of Amida" (*Monumenta Nipponica*, 38-1, Spring 1983, pp. 73-84.) 3. June 14. continuation of above. 4. June 28. Thomas Kasulis, "Book Review of *Letters of Shinran: A Translation of the Mattoshō*" (*Philosophy East and West*, 31-2, April 1981, pp. 246-248.) 5. July 5. Thomas Kasulis, "The Kyoto School and the West" (*The Eastern Buddhist*, 15-2, Autumn 1982, pp. 125-144.) 6. November 15. Whalen Lai, "Nonduality of the Two Truths in Sinitic Madhyamika: Origin of the 'Third Truth'" (*Journal of the International Association of Buddhist Studies*, 2-2, 1979, pp. 45-65.) 7. December 13. Ryojin Soga, "Dharmakara Bodhisattva" (Fredrick Frank, ed., *The Buddha Eye*, 1982, pp. 221-231.) 8. February 6, 1984. Luis O. Gomez, "Expectations and Assertions: Perspectives for Growth and Adaptation in Buddhism" (*The Eastern Buddhist*, 16-2, Autumn 1983, pp. 26-49.)

## III. Bibliography and Library

The compilation of a comprehensive bibliography of Western language works on Buddhism, and the creation of a library of important works on Buddhist studies and related subjects, are two important objectives of this project. Since a substantial collection of bibliographical data concerning English works on Buddhism was made in the previous year, this year's effort was centered on augmenting this collection. A portion of our research was published as "Bibliography of English-language Works on Pure Land Buddhism, 1960 to the Present" (*Annual Memoirs of the Otani University Shin Buddhist Comprehensive Research Institute*, vol. 1, 1983, pp. 1-17). During the year also, we considered means of creating a computerized bibliographical system.

Further a library of Western works on Buddhism and cognate subjects of Oriental studies, religion, philosophy, etc., is essential in carrying out the research of our project. Thus have put much effort into the building of such collection. This year we obtained about 650 books, and we plan to add to our library at his pace annually.

『海外仏教研究』研究会報告

〈指定研究〉

日時：昭和58年7月7日(木) 午後4時10分

場所：研究所会議室

## Shin Buddhist Studies and America Today

ノースランド大学 教授 トーマス・カスーリス

Thomas P. Kasulis  
Professor, Northland College  
Ashland, Wisconsin

### Academic study of Buddhism in the U. S.

From my standpoint as a philosopher interested in Japanese Buddhist thought, I think an ideal Ph.D. Buddhist Studies program should be located in a university having four special characteristics. Namely, the university should have: (a) an excellent Asian Studies curriculum (language, history, social sciences, literature, intellectual history, etc.), library, and faculty, (b) a strong faculty in comparative religion, (c) a strong philosophy department open to East-West exchange, and (d) general cooperation among these three areas. I believe there are few, perhaps no, such universities in the United States.

### The intellectual/spiritual climate for studying Buddhism in the U.S.

Financial difficulties are forcing many universities to cut back and limit programs. In general, Buddhist Studies are considered a fringe area for technical specialists with little relevance to larger social and educational concerns. Therefore, such specialized programs will be decreased and phased out. If Buddhist Studies will continue as a discipline in the United States, it will probably be completely absorbed into more general religious studies programs. Therefore, Buddhist specialists must become ever more *comparative* in perspective with strong backgrounds in Western methods for studying religion and in "Western" religious traditions.

In a Gallup Poll taken last year over 90% of all Americans answered "yes" to the question "Do you believe in God?" At the same time, the majority of Americans do not belong to any specific church and do not practice religion in any formal way. In short, most Americans have religious feelings, but they are hesitant to define the object to those feelings in any strict doctrinal way and are hesitant to commit themselves to a single religious tradition exclusive of others.

Buddhist specialists want to show how broad and comparative their interests are. Western theologians want to find new ways of reformulating Christian doctrine so that Americans will be more interested in traditional Church structures. When these two groups meet, the result is

“Buddhist-Christian” dialogue. Some of this dialogue is sincere and spiritually motivated toward mutual understanding. Some of it is superficial – Buddhologists trying to gain academic recognition by associating with established Christian experts; Christian theologians primarily interested in getting new metaphors, terms, and ideas for reexpressing the traditional Christian teachings. It is important at the outset to clarify the ultimate goals and purpose of any such Buddhist-Western dialogue.

### **The study of Shin Buddhism in America**

The first point which we must remember when we consider the study of Shin Buddhism in America is that Shin Buddhism is an America religion (in Hawaii and California). With changes in anti-discrimination laws (“affirmative action”), many more Asian Americans are being admitted to prestigious American universities. For example, this year’s (1983) Harvard freshmen class will be 10% Asian American, mostly third and fourth generation Japanese Americans. Many of these students come from families traditionally belonging to Shinshū. Yet, like most Americans, these Japanese Americans do not typically identify themselves with religious institutions (in this case Buddhist rather than Christian). Shinshū faces a problem in America much like the problem faced by many Christian churches.

Shin Buddhism has been little studied in the West. There is only one major book in English on Shinshū by an American academic: Alfred Bloom’s *Shinran’s Doctrine of Pure Grace* (Tuscon: University of Arizona Press, 1965). It was written thirty years ago.

Zen Buddhism was introduced to the West by the powerful personality of D. T. Suzuki. Shin Buddhism has had no such charismatic spokesperson. As my “Kyoto School” review article (“The Kyoto School and the West: Review and Evaluation.” *The Eastern Buddhist*, vol. 15, no. 2, Autumn 1982, pp. 125–144) might suggest, there are positive and negative effects from this.

It is possible that many of the earlier generations of American Buddhist scholars first studied Buddhism out of some dissatisfaction with Judeo-Christian religion, Western culture, or both. From this perspective, Shinshū (with its emphasis on a particular heavenly Buddha and on faith) probably looked too “Christian” and too “Western” to be interesting. Alternatively, to the earlier Buddhist scholars who came from Protestant or Roman Catholic clergies, Shinshū seemed a heretical Christianity. Shin Buddhists, they might have thought, believed in a “false God,” whereas Zen believed in “no God.” For a Judeo-Christian, rooted in one’s own faith tradition, Zen is less likely to be disturbing.

Let us now consider the future study of Shin Buddhism in relation to Western philosophy. There are three major traditions in Western philosophy today: Anglo-American analysis, existentialism-phenomenology, and process philosophy. The United States is currently dominated by the analytic tradition. Since so much of this tradition involves the careful analysis of terms and concepts, analytic philosophers are generally uninterested in thought written in foreign languages, whether those languages be Western (French, German, Italian, Latin) or Eastern (Sans-



krit, Pali, Tibetan, Chinese, Korean, Japanese). The analytic philosophers have, however, done some analysis of religious terms and religious forms of language. Some of this work has been quite influential on Western Judeo-Christian theology, and Buddhist-Christian dialoguers should be aware of it.

The existential-phenomenological tradition is followed by a minority of American philosophers (perhaps 25–30%). Generally, these philosophers are much more interested in cross-cultural philosophizing, but their technical jargon is often difficult for nonspecialists to penetrate. Such philosophers as Heidegger, however, have had an enormous influence on Judeo-Christian theology in the twentieth century. Since that tradition has also influenced Japanese philosophy (especially the Kyoto School), an interesting Japanese-American dialogue can be pursued fairly readily. From the Shin Buddhist standpoint, the work of Takeuchi Yoshinori should be given special attention in this regard.

The process philosophy tradition (most notably that of Whitehead) has had very little effect on American philosophers, but it has a few very vocal and influential representatives in Christian theology (for example Charles Hartshorne and John Cobb). John Cobb is, of course, a major figure in Christian-Shin Buddhist dialogue and his work should be carefully studied by Shin Buddhist scholars interested in such dialogue.

In general, whatever philosophical school one approaches Shin Buddhism from, Shin Buddhist teachings can be said to need a thorough philosophical reevaluation. As a Westerner trained in philosophy, I find most Shinshū commentaries to be lacking philosophical clarity and consistency. Most works on Shinshū are either historical, textual-philological, or popular edifying sermons. There is very little philosophical work being done. As a Western philosopher, I would like to see more careful work done on such questions as:

- (1) What is *shinjin* and how does it relate to *specific* Western conceptions of faith?
- (2) What is the precise status of Shin Buddhist metaphysics? How does it relate to *mikkyō* ideas such as *hosshin seppō* or *kengyō* ideas such as *hongaku shisō*? I am interested in the philosophical, not just the historical, relationship among these terms. What is the precise relationship between the *dharmakāya* and Amida? In practical terms, what is the relationship between *jinenhōni* and *shinjin*?
- (3) What is the nature of Shin practice (which is not a practice)? How does Shinshū deal with the problem of predestination – that is, if all *jiriki* is *hakarai* and not allowed, one is saved only by Amida. Therefore, it seems that Amida chooses who to save and if I am not born in the Pure Land, that is Amida's fault, not mine. This is a classic problem in the "justification by faith" tradition of Christianity as well. How does Shinshū solve the apparent difficulty?
- (4) Is *shinjin* in the mind, the feelings, or the body?
- (5) What is the influence of Japanese culture on Shinshū? How has Shinshū influenced Japanese culture?

### The future study of Shin Buddhism in relation to Judeo-Christian theology

Let me mention here some thoughts on the future study of Shin Buddhism in relation to Judeo-Christian theology. First, it is important that Shin Buddhists also be in dialogue with other Buddhists, especially other Japanese Buddhists. Shin, Nichiren, and Zen, for example, ultimately have more in common than any of them do with Christianity or Judaism. Inter-Christian and Jewish-Christian dialogue have been very active for about 20–25 years. Through that experience, Christian theologians have learned a great deal about communication and about the character of their own perspectives. Japanese Buddhists must do the same. They must be sensitive to their own cultural identity as well as their distinctive position in Japanese culture. (Most Westerners, because of Suzuki, think of Japan as a “Zen culture,” yet only 10% of the Japanese belong to the Zen sect. Aren’t Shin Buddhists disturbed by this characterization of their own society?) Religious truths transcend culture, but religious people exist only in culture.

Second, Shin Buddhists must undertake a more careful study of Western theological positions. Gross generalizations such as “the West is dualistic and the East is nondualistic” are not helpful in undertaking serious intellectual and spiritual discussion. For example, Roman Catholics in receiving the Eucharist literally eat their God. That hardly seems either transcendent or dualistic. If the Eastern side of Buddhist-Christian dialogue does not do their homework in studying modern Western theology, the Western Christians will dominate the discussion and use categories that subtly, but significantly, distort the Buddhist experience.

Shin Buddhists must take a more affirmative, even aggressive, stance. This is very difficult for Shin Buddhists and it opposes many basic Shinshū values. To most Shin Buddhists, argumentation seems *hakarai*. Even Shinran did not claim to know the truth; he only knows that other paths did not work, so he ultimately placed his trust in Honen and his teaching. Unfortunately, Westerners are more attracted to the combative style of Zen. In the meeting of East and West, the qualifying style of Shinshū is difficult to hear. Ironically, the “I cannot be certain” position of Shinshū is ultimately more modern than dogmatism, whether Christian or Zen. Thus, somehow Shinshū Buddhists must learn to talk more loudly, but just as humbly. The quietness of Shinshū must be more forthrightly expressed. This change in stance is probably just as important in Japanese society as it is in the exchange with the West. Japanese society is getting very noisy, too.

海外仏教研究では、昨年7月、在洛中のトーマス・カースリス氏を迎えて、「現代アメリカと真宗」と題して御講演いただいた。氏の研究領域は、禅思想、近代京都学派の哲学であるが、最近では真宗の思想にも深い関心を寄せておられる。講演は、氏の活達な日本語によって、明快な論調で行われた。上の英文の梗概は、その折氏より配付された講演のレジメである。

カースリス氏の提言は、真宗が、より普遍的な言葉を用いて、西洋（とりわけキリスト教神学）との間に、大胆な「対話」を思想の次元で繰り広げよ——ということに尽きる。（安富記）

〈一般研究〉

## 昭和58年度「一般研究」研究概要

### 〈共同研究〉

## 大谷大学所蔵西藏蔵外文献の 歴史的・思想的位置づけに関 する研究

研究代表者 小川 一乗  
本学教授 (仏教学)

当研究班の研究目的と内容及びその意義に関しては、『研究所報No. 5』に既に述べた。その際に触れたように、本学所蔵の蔵外文献は量的にも甚だ膨大であるばかりでなく、内容的にも仏教のみに限らず、天文学・医学など多方面に及んでいるために、その全貌を把握することは極めて困難である。従って個々の文献の歴史的・思想的意義を究明するという本来の目的を達成するためには、その目的達成のための不可欠の前提として、まず、既刊の『大谷大学所蔵西藏蔵外文献目録』に対する題名や著者名から検索しうる索引、及び内容項目による分類表の作製が必要となる。当研究班は、それらを完成することを当面の目標として発足した。

この種の索引類の作製は、当研究班が組織される数年前から研究者の間でその必要性が唱えられ、本学においても西藏大蔵経勘同目録編纂室でその準備作業が続けられてきた。今回、本研究所の共同研究の一つとして当研究班が組織されることになり、これまで準備を進めてきた調査カードを改めて検討し、原稿に直す作業が始められた。昨年度は、それらの作業のうち、

1. 正式書名索引

書名の full title の西藏式アルファベット配列による索引

2. 略式書名索引

西藏文献の正式書名は概して非常に長いので、通常は略式書名で呼ばれる。

3. 著者名の西藏式アルファベット配列による索引

4. 内容項目による分類目録

の四種類の索引類を原稿に移すことをほぼ完成した。本年度は、これらを完成し、その後に索引の正確さを期するために、改めて原典の全てにわたって題名及び著者名の表記を確認するとともに、既刊の『大谷大学所蔵西藏蔵外文献目録』に対する正誤表を作製し、それらを合せて一本として出版できる段階にまで作業を進めることを第一の目標とした。この目標は一応達成されたが、出版する際には西藏文字の活字を使用して印刷する場合に生ずる諸種の問題のため、尚しばらくの日数を要するものと考えられる。

今年度の第二の目標は、現在本学にしかその存在が確認されていない稀観蔵外文献を影印出版するための準備を始めることである。西藏は周知の如く、1959年の中共軍の侵攻以来、外部との交流を断たれている。現在我々の入手しうる西藏蔵外文献資料は、その時亡命した西藏人比丘たちによって持ち出されたものが殆んどである。近年アメリカは国家的な経済援助の下に、それら亡命比丘たちの所有している西藏蔵外文献を影印出版してきた。しかしそれでもなお、その時に持ち出されなかったり、既に散佚してしまっていたりして、現在入手できない文献が相当数に昇る。

上記のような状況の中にあつて、本学に収蔵されている文献は、明治30年代に寺本婉雅や能海寛たちによって蒐集された、世界にも類を見ない程よく整った貴重な資料である。国内の研究者のみならず、欧米のチベット学界からも近年頻りに文献の公開が求められるようになってきた。このような要求に応じて稀観書を学界に公開する準備に着手した。既刊書の諸目録との対照によって本学にしか存在しないと思われる文献を推定する作業が為された。また今枝由郎氏や E. シュタインケルナー氏など外国の西藏蔵外文献研究者の来日の機会を把えては情報を得るように努めた。

稀観書の出版にそなえて情報収集の作業を行っていた昨年9月、折しも開かれていた国際東洋学会議(CISHAAN)に出席していた E. G. スミス氏の来訪を受けた。氏は先に触れたアメリカの国費による西藏蔵外文献の影印出版の責任者(Field Direction of U. S. Library of

Congress Office, New Delhi)である。西藏文献に関する氏の博覧強記ぶりは定評のある所である。上記の索引類を、我々が懇請するままに検討しおえた後に、『大谷大学所蔵西藏文献目録』の中から稀観書を枚挙して、その影印出版の必要性を強調した。

今後は、氏の助言をも参考にして、学術的な形でそれらの文献を影印出版することを計画している。そのためには、その内容を概説する序文や、目録などを作製する作業がなされなければならない。それはまさしく当研究班の目的とする「大谷大学所蔵西藏外文献の歴史的・思想的位置づけに関する研究」への一歩をいよいよ実際に歩み出すことになるのである。とは言え、広大な領域に及ぶ膨大な文献群を対象とする研究であり、研究の歩みは遅々たるものとなるだろうが、しかし一歩一歩着実に文献研究を遂行していくことこそが最も大切なことであろう。このような研究姿勢の下で、上述の作業と並行して、次のような文献研究会が行なわれてきた。

1. ゲールク派の祖であるツォンカパによる入中論釈
2. 同じくツォンカパの了義未了義論善説心髄
3. スムパケンポによる仏教史パクサンジョンサン

これらの研究会によって、チベット仏教の代表とされるゲールク派の思想を学ぶという面とチベット仏教の歴史を学ぶという面とを少しづつ具体化しようとしている現状である。

### ＜共同研究＞

## 近代文学における仏教的諸相

研究代表者 渡辺 貞磨  
本学教授 (国文学)

### (一)

この共同研究は、今までほとんど照射されることがなかった“仏教は日本近代文学といかにかかわるのか”という課題と取り組み、その具体的な方法論を模索しようとするものである。その研究の具体的な計画として、本年度(58年度)は、特に宮沢賢治を取りあげた。仏教と近代文学とのかかわりを考える場合、宮沢賢治の作品はもっとも近距離にあると言えるからである。

その結果、①因縁、法の永遠性、十界互具といった仏教思想を賢治の諸作品の中に指摘することができた。②これらの仏教思想が賢治の作品において、文学として実現されていることを指摘し得た。例えば、従来、比喩と

考えられていたものが、賢治の作品の中にあっては、実は比喩ではなく、仏教思想そのものの文学的実現であることを知り得た。

### (二)

以上の結論に至るまでの経過について、簡単に報告する。

(1)研究会は、原則として毎月第二水曜日の午後4時から開催した。主として宮沢賢治の『注文の多い料理店』を取りあげ、〈序〉、〈どんぐりと山猫〉以下の各編について検討し、その研究の中間報告を『研究所報』No. 8(昭和58年11月)に掲載した。さらに詳しい内容は「研究成果」として報告する予定である。

(2)研究資料調査状況については、8月、12月の2回にわたって、各研究員が国会図書館・国文学研究資料館・近代文学館に出張し、主として宮沢賢治関係の資料を調査し、入手しがたい資料をコピーするなどして共同研究の研究材料とした。

(3)資料収集状況については、後記の通り、『宮沢賢治全集』をはじめ、賢治関係の研究書・研究資料を中心に収集したが、今後の研究のため、賢治以外の作家の研究資料をも収集した。

(4)公開講演会については、後に詳しく記すが、3月21日(水)、松陰女子学院大学教授・本学講師、山本洋氏に“紀野一義論文「賢治文学と法華経」および萩原昌好論文「修羅と宇宙」をめぐって”と題する講演をしていただき、その後、各研究員より活発な意見を出し、宮沢賢治と仏教について再確認したことである。

### (三)

#### 資料収集状況一覧表

- (1)賢治関係 ●『新修宮沢賢治全集』全十六巻、別巻1(筑摩書房) ●恩田逸夫『宮沢賢治論』3冊(東京書籍) ●草野心平編『宮沢賢治研究』2冊(筑摩書房) ●同氏編『宮沢賢治研究』1冊(十字屋書店) ●佐藤隆房『宮沢賢治』1冊(富山房) ●小田邦雄『宮沢賢治』1冊(白欧社) ●境忠一『宮沢賢治論』1冊(桜楓社) ●谷川徹三『宮沢賢治の世界』1冊(法政大学出版局) ●小田邦雄『宮沢賢治覚え書』1冊(弘学社) ●分銅惇作『宮沢賢治の文学と法華経』1冊(水書房) ●小野隆祥『宮沢賢治の思索と信仰』1冊(泰流社) ●天沢退二郎『宮沢賢治の彼方へ』1冊(思潮社) ●小倉豊文『「雨ニモマケズ手帳」新考』1冊(東京創元社)ほか
- (2)その他 ●『岡本かの子全集』18冊(冬樹社) ●『萩原朔太郎全集』11冊(筑摩書房) ●『葛西善蔵全集』6冊(文泉堂書店) ●『川端康成全集』19冊(新潮社) ●小田良弼『近代宗教文芸の研究』1冊(明治書院) ●清水茂雄『文学と宗教』1冊(教育出版セ

ンター) ●嶋岡展『宗教と文学の地平』1冊(春秋社) ●永藤武『文学と日本的感性』1冊(ペリカン社) ●峰島旭雄『近代日本の思想と仏教』1冊(東京書籍)ほか

#### (四)

公開講演会は、昭和59年3月21日に実施し、松陰女子学院大学教授・本学講師、山本洋氏に、「紀野一義論文『賢治文学と法華経』および萩原昌好論文『修羅と宇宙—宮沢賢治の作品に見られる宇宙観—』をめぐって」と題して講演していただいた。

山本氏は、まず、二論文について、

1. 紀野氏の論文は、法華経の言葉が、現代日本語に平明に訳されていてわかりやすい。
2. 萩原氏論文では、「日蓮主義教学大観」からの引用部が15項目にわたっており、氏の試みられた解釈のことばも、紀野氏のものほど平明でなく、わかりにくい。

という点を指摘され、文学研究における仏典の引用・解釈・解説について、一般文学研究者として、表現上、論述上の配慮の必要性を強調された。

ついで、山本氏は、紀野氏の論文を主として取り上げながら、文学研究の基本をふまえられたいくつかの指摘をなさしたが、おおよそ、次の3点にしぼることができる。

1. 宮沢賢治の詩を、法華経だけで解明できるのか。他の仏典が根拠になっているということはないのか。
2. 仏典や仏教思想の反映と見る論文には往々にして、厳密な論証抜きで、断定的な作家論や人物論になっていたり、作家論と人物論が混同されているきらいがある。
3. 宮沢賢治作品の解明には、氏の生活体験上の苦しみ、農民としての経験、自然体験との関連も考えるべきではないか。

など、紀野氏の論文が「賢治文学と法華経」との枠内の論文であることを認めながらも、「仏教文学」という観点からの研究が、一面的、断定的、作家と信仰者の混同などの問題点を内包している点を指摘された。

そして、賢治文学研究の問題点として、

1. 法華経の詩的継承とは、具体的にどういうことを意味するのか。
2. 「仏教文学」として考える前に、思想中心のテーマを持つ作品として考えるべきではないのか。(仏教・キリスト教・アナーキズム・マルキシズムなどに共通する問題があるのではないか。)
3. 文芸作品は、作者の理想や生命感の高揚によるよりも、むしろ、絶望や不安によって描かれている方

が、読者に感動をあたえるものではないのか。

と述べられ、賢治作品の文学的価値の判定、研究者、とくに、仏教との関連をさぐる研究者への問題提起をなされた。

このあと、山本氏と研究者の間で、具体的な賢治作品、二、三例をあげておくと、「春と修羅」の序詩の解釈、「どんぐりと山猫」の一郎の判決の意味などをめぐって、活発な意見交換をおこなった。

おわりに、山本氏とわれわれ研究員の間で意見が一致した点を挙げておくと、

1. 「仏教文学」としての観点からの研究であっても、文学研究の基本としての論証の手続きを欠いてはならないこと。
2. ある作品が、仏教思想の具現化であると判断するためには、作者の思想の文学への具現化のプロセスが十分に解明され、その根拠についての検討、正しい論証を必要とすること。

以上2点であった。

#### ＜個人研究＞

## 蓮宗宝鑑の研究

研究員 安藤 智信  
本学助教授 (東洋仏教史学)

◎元・明・清における本書の出版状況と歴史的意義

本典『蓮宗宝鑑』(以降は『宝鑑』とよぶ)は、官板としては明版(北藏)、清版の両大蔵経があり、さらに私版としては、幾度も日中両国で刊行されている。われわれの手もとにある和刻本(正保四年1647 井上治右衛門板行のもの)には、永楽十五年(1417)に鍾山靈谷寺住持の浄戒の手になる刊記をその本の末尾に入れていることから、永楽本を底本にしていることがわかる。またわれわれが会読で用いているのは大正蔵経本(以降は「大正本」とよぶ)である。この大正本が底本としているのは、宣徳四年(1429)の刊本である。大正本の巻末に「大明宣徳四年歲次己酉夏末秋初禪林解制日 僧録司右講經古井沙門 敬跋」という刊記があることからである。なおまた大正本は校勘のため、㊦本として「崇禎十七刊増上寺蔵本」なるものをあげているが、実は明版大蔵経(北藏)本のことである。というのは、われわれが会読においてこの明版を坐右にして逐一対照したところ、大正本における校勘記の註記の部分が一致するし、また明

版の『宝鑑』は崇禎十六・十七両年に刊刻されている刊行経緯も全く合致するからである。このような明・清の諸刊本のほかに、元の果満が編集した『盧山復教集』巻下、末の部分の記事からみると、元にすでに刊本のあったことをうかがわせる。このような本典の刊行状況を見ても、近世仏教史上にいかにながくかつ広く流布した典籍であるかが知られるであろう。

#### ◎会読研究会について

既述のごとく会読に採用したのは大正本である。大正本は『宝鑑』の前に五つの文をかかっている。五つの文とは、①明の高官であったが、紫柏真可の門弟でもあったらしい銭士升（～1651）の「序」、②著者普度の識文、③大圓仏鑑禪師希陵（1247～1322）の手書、④中徳（？）の「叙」、⑤ふたたび普度の「叙」から成る。『宝鑑』の内容に入るにさきだつてこの五文を会読した。

つぎに『宝鑑』の内容に入り、まず『宝鑑』の著者普度自身が中国浄土教史上において立脚しようとする場所をどこに置こうとしているのか。その大概を知る必要性にもとずき、『宝鑑』第四卷念仏正派説から出発した。この巻は、まず普度が蓮宗の祖師と仰ぐ盧山慧遠および盧山十八賢にはじまり、曇鸞・智顛・善導・法照・少康・省常・宗蹟・延壽・遵式・文彦博・宗坦を経て、同宗の宗祖とされる茅子元をはさんで、楊傑・王日休という順序で配列されている。さきの冒頭の諸文とこの巻は当研究の基礎部分に相当するため、大内文雄嘱託研究員と両名だけですゝめた。大正本をテキストに、明版・清版両大藏経および和刻本とを対校しながら解読した。大正本との相異をしばしば見出してたどすことができ、云うまでもなく有効であった。そのため一層大正本が底本としている宣徳四年刊本なるものの所在をつきとめて、それとの対校を希求してやまなくなった。

念仏正派説の会読によって普度のいう「蓮宗」の立場をほぼ把握しえたところで、巻十、念仏正論説に入った。本典の末巻ということであり、著者の撰述の意図・目的がほかの部分にくらべて、もっともきわだって強調されているところでもあるからである。特に偽似白蓮宗（普度は「蓮宗の弟子を詐称するもの」というよび方をして）に対する普度の筆鋒はするどく、かつかれの立場からみた当時の邪心・邪業の数々を具体的に摘発列挙して叙述している。従つてこの巻を解読することによって、われわれは当時、民間で唱導された偽似白蓮宗の教説と実践の内容を中心とし、その他もろもろの俗信仰の実態を知ることができるからである。それとともにやむにやまれずして普度が本典をあらわさねばならなかった因由を、より一層鮮明に確認しうる部分であるからである。なおこの巻の会読には、滋賀教授・藤島助教授・桂華助

手も随時に参加されたことを附記する。

会読で直接精読しえた内容はおおむね上記のごとくである。

#### ◎その他

次に当研究期間中に会読と並行して行ったこととしてふたつのことを附記することとしよう。

##### 1) お茶の水図書館での調査について

詳しくは大谷大学真宗総合研究所の「研究所報」No. 8（1983. 11. 1発行）誌上に述べてあるので参照されたい。

##### 2) 当研究課題との関連研究発表について

1983年12月16日日本の東洋史学会・東洋仏教史学会共催の「研究発表会」において、筆者は「白蓮宗に関する研究史の問題点をめぐって」というテーマのもとに口頭発表を行った。それまですゝめていた白蓮宗に関する研究文献の蒐集と解読によって知りえたところを報告した程度のものである。それによって白蓮宗の主典である『宝鑑』に正面からとりくみ、本書の核心に到るという究明がほとんどみあたらないことがはっきりしてきたというのが筆者の見解である。

このような本典の本格的解明をふまえるところに、はじめて白蓮宗の当時のなまの実態と歴史的意味がみえてくるであろうということを、ますます痛感するにいたつた次第である。

#### ＜個人研究＞

## 華嚴教学に受容された起信論の思想的研究

研究員 鍵主 良敬  
本学教授 (仏教学)

本研究では当初「華嚴教学に受容された起信論の思想的研究」という研究課題のもとに、智儼・元暁・法蔵・李通玄・澄観・宗密といった隋唐時代の中国及び朝鮮の華嚴宗の学匠と目される主要な思想家の起信論受容を網羅する計画であった。しかしながら実際に作業を開始してみると予定していた研究組織を変更せざるを得ないなど諸般の事情によって当初の計画を履行することが不可能な状況となった。そこで新たに研究補助員等を依頼し、4月22日付で研究計画の変更を行なった。当初の中国華嚴宗の主要な思想家を網羅する計画は、華嚴教学の草創期から完成期に亙つて大乘起信論が果たした役割を解明す

るという課題に変更された。即ち、華嚴教学は第三祖賢首大師法蔵を分水嶺として区分されるが、その前半は法蔵に至って集大成されるという歴史的経過をたどっているからである。従って澄観・宗密といった法蔵以降のいわば展開期に於ける諸問題は本研究の枠外とすることにした。

本研究の主な研究目的については、既に研究所報No. 9に概説した通りである。それは、起信論そのものの研究ではなく、起信論が如何に中国の仏教者たち就中華華嚴思想家たちに吸収されていったか、彼らが起信論の所説を素材としてどのように自らの思想を構築していったか、を解明することであった。また研究の範囲を法蔵以前に限定し、法蔵教学に重点をおきながら、それと直接的な形で関係があったと思われる人々の所説を検討することによって、起信論を視点とした法蔵教学の解明に特に専心することとした。その理由は、法蔵の著した大乘起信論義記がそれ以後の起信論理解の方向性を決定してしまうほどの大きな影響力を持ったものとして扱われてきたという事実に基づくものである。そのことは、例えば起信論の所説を真如の不變と隨縁という用語で理解しようとする伝統的な解釈が比較的最近まで行なわれてきたということなどによっても首肯されるであろう。

以上のような研究目的を達成する為には、相当な量と且つ精度の高い資料調査を必要とした。幸い本研究で扱おうと考えた第一次資料のほとんどは、大正蔵経及び続蔵経に収められており入手困難なものはなかった。従って5月中には、凡その資料収集を終え、直ちに資料調査を開始することができた。資料調査は、具体的には膨大な量の資料の中から本研究の対象となる所説を抜き出しカード化するという作業がその主なものである。計画では夏期休暇終了までにそれらの作業を終える予定であったが、実際に作業を始めてみると、ここでも計画通りいかない様々な事柄に遭遇することとなった。夏期休暇終了後の9月20日に第1回めの研究会(内容的には資料調査の経過報告と問題点の検討が主なものである。)を持ったのを始めとして月平均2回程度の研究会を重ねながら各研究補助員の資料整理が進められた。各補助員の資料調査については凡そ次の三つの視点によって実施された。

その第1は、大乘起信論義記そのものの研究である。義記については既に先学によって元暁の起信論疏との近似性が指摘されているので、それらの研究結果を踏まえつつ本研究では法蔵と元暁の主張のうち共通する部分と異なる部分を具体的に明確にするよう努めた。その結果として、両者の間には起信論理解の質的な面に於て若干の相違が見られ、外形的に近似しているというだけの理由で両書を混交してはならないことが明らかとなった。

この点については、研究成果として稿を改めて報告するつもりである。

第2は、法蔵教学全般に亙る起信論受容の実態をつかむことである。一般に法蔵は起信論の大きな影響を受けていると言われるが、それは具体的には起信論思想のどの部分なのか、を明瞭にすることである。特に起信論は、大乘仏教の多岐に亙る教説を巧みに摂取したものである。こうした面からの資料調査は不可欠である。その為にも、法蔵の数多くある著作の中でも最も重要なものの一つであると考えられる華嚴経探玄記を取り上げた。この点については、先般、大谷大学の法蔵経学術用語研究会によって、大蔵経索引第二十巻経疏部Ⅱとして公刊されたものの中にこの探玄記も含まれており、既に学術用語の整理が為されていた事が大いに役立った。探玄記は大正蔵経で400頁にも及ぶ大部なものであり、その解読には非常に困難を伴い、大量の時間を必要とした。又、探玄記以外の資料にも一応目だけは通したが、十分に調査し得たとは言いがたい。

第3は、法蔵と直接関係のあった諸師(智儼・元暁・李通玄)の起信論受容を精査することである。これは部分的に前の二つの視点と重複する所もあるがこの成果を第1、第2の視点と照し合わせることによって法蔵の起信論理解の特徴もしくは独創性を明確にするという意図を持ったものである。智儼は、直接的な法蔵の師であり、事実上の中国華嚴宗の開祖と目される。元暁は、海東の積尊と仰がれる人物であり、直接的には智儼との交渉は認められないが、法蔵は同門の先輩として常に敬意を払っていた形跡がはっきりと認められる。又、李通玄は、法蔵と同時代の在野の華嚴経実践者の雄である。こうした諸師たちとの有形無形の関わりの中に法蔵は位置するわけであるから、法蔵教学の背景としてこれらの諸師の主張は当然無視することができないわけである。この点についても研究所報No. 9に簡単な報告をしたので重複を避けたいが、更に詳しい研究成果を近日中にまとめたと考えている。

年度始めから研究組織の変更を余儀なくされ、研究の内容も多少修正しなければならないという状況のもとで一年間研究を続けてきたが、振り返ってみればそのようなアクシデントが却って研究課題を精練するという形で作用したのかもしれない。単年度という限られた期間を鑑みれば、当初の研究計画では恐らく多くの無理があったであろうことは想像に難くない。しかしながら本研究の成果によって、研究課題設定の方向性に誤りはなかったことが確認されたので、今後も独自の立場で研究を続行していくつもりである。

~~~~~

## 〈個人研究〉

## 日系アメリカ人の教育意識に関する研究——日系アメリカ人を取りまく環境と彼らの社会・教育意識について

研究員 田中圭治郎  
本学助教授 (教育学)

まず最初に日系アメリカ人を取りまく環境と適応について調べてみた。一世はアメリカに渡った時、アメリカ文化という異文化に触れ、カルチャー・ショックをうけたことであろう。その結果彼らはどうそれに対処したのであるか。それを考える際、彼らの置かれた環境を考える必要がある。アメリカはイギリスの植民地が独立した国であり、まず最初の移民はイギリス人であり、それに続いてドイツ人、スカンディナヴィア人、後にはアイルランド人が続いた。しかし、南ヨーロッパ、東ヨーロッパからの移民が始まるとともに、移民を制限しようという動きが出てきた。特に日本人、中国人はアジア人であるがゆえに、その排斥の程度はかなり厳しいものがあった。一世はこのような偏見・差別の中で日本人町を形成して、お互いに集まり住むことにより自らを守るとともに、自己を変革してアメリカ文化を身につけ、アメリカ社会の中へとけ込もうと努力した。二世になるとこの傾向はかなり顕著になっていく。自己をアメリカ人として位置づけ、アメリカ人になり切ろうとした。がしかし、アメリカ社会は彼らをアメリカ人として受け入れようとはしなかった。

第2番目に、日系アメリカ人への偏見、差別がどのようなものだったかを、第二次世界大戦中のアメリカ本土での強制収容所に焦点をあてて調べてみた。アメリカにおける特にマイノリティに対する偏見・差別とはどのようなものか。日系人はそれにどう対処したのか。強制収容所はなぜ生じ、どういう実態であったのか、さらにそこに収容されている日系人たちが白人たちからの偏見・差別に対してどう対処したかについて詳細に調べてみた。特に兵役に服するかどうかの日系人の対応、収容所内の日系人の日本語教育等々、多岐にわたって調べてみた。

第3番目に、現在の日系人にアンケート調査をすることにより、彼らがどのような社会的かつ教育的意識を持っているかを調査した。日系人の一世はほとんど仏教徒であったが、世代が変わるごとにキリスト教徒が増えてきている。ここではアメリカ文化にある意味では「適応」が遅れている仏教徒に焦点をあて、彼らが受けた偏見や差別、逆に彼らが持っている偏見や差別意識について調

べるとともに、日本についてどのような関心を持っているのか、また現地の公立学校ならびに日本語学校への通学態度について調べてみた。日系人の仏教徒でもアメリカ本土とハワイではかなり差があると思われるので、両地域でそれぞれ約60名の信徒にアンケート調査を求めた。ハワイの日系人は人種的な偏見・差別をアメリカ本土ほど多く受けない。それゆえ、自らも他人種に対してそれほど偏見・差別意識を持たない。この調査では、仏教徒に加えて神道(天理教)の信徒に対する調査を併せて行った。アメリカ社会の中で、仏教はある程度他の民族との共通性を持つが、神道は日本独自の宗教である。神道の信徒は日本的なものをかなり多く持つ人びとであるということが出来る。この場合も、アメリカ本土とハワイの信徒それぞれ約60名にアンケート調査をした。

アメリカ本土の仏教徒、ハワイの仏教徒、アメリカ本土の天理教徒、ハワイの天理教徒、という4つのタイプに分け、それぞれ自己の受けた偏見・差別、自己の持つ偏見・差別意識の項目の比較検討をしてみた。

最後の研究テーマとして、日系アメリカ人にとって、社会・教育意識とは何か、それらとわれわれ日本人の社会・教育意識との関連はどうか。さらに彼ら日系人の姿は、日本人の将来の姿と重なりうるのかといった事項を検討した。日系人が受けた偏見・差別と彼らの社会観・教育観がどう関連しているのか。また、宗教、居住地域が日系人の社会・教育意識の大きな要素となりうるのか、すなわち、偏見・差別が厳しいほど居住地域が固定し、又階級間移動の熱意がより大きいということが出来るかどうか、それゆえ教育への願望が偏見・差別により増大させられるのかどうか、を調査してみた。

この調査により、日系人に対する偏見・差別の問題が現在の日本人にどう問いかけるのか、また宗教がその人間の価値観を左右するのか、だとすればわれわれ日本人の宗教観は今後どうなるのかを深く問い直してみたい。

---

 研究所人事
 

---

所長交代 (昭和59年4月1日付)

新所長 大谷大学教授(宗教学)

武田 武磨

主事交代 (昭和59年4月1日付)

新主事 大谷大学助教授(仏教学)

片野 道雄

## 研究所報 第10号

1984年7月31日 発行

編集発行 大谷大学真宗総合研究所

603 京都市北区小山上総町